

イライジャーナンバー・スリー

知らしめよ

Jeff Pippenger

2023-09-29

夕の献げ物の時刻になったとき、預言者エリヤが進み寄って言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。きょう、あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなただけのしもべであり、また、私がこれらすべての事をあなたの仰せによって行ったことが知られますように。」列王記上 18章36節

私たちは、象徴としてのエリヤの特徴を明らかにしてきた。その特徴の一つは、エリヤ、バプテスマのヨハネ、そしてウィリアム・ミラーの働きとメッセージが、裁きの器であったということである。彼らのメッセージは、主によって、それぞれの時代を試すために用いられた。イエスは、ご自身が来られなかったなら、言い訳ばかりするユダヤ人には罪はなかっただろうと言われた。

もしわたしが来て彼らに語らなかつたなら、彼らには罪はなかつたろう。だが今は、彼らには自分の罪について言い逃れの余地がない。ヨハネ 15:22.

エゼキエルは、彼の時代の屁理屈をこねるユダヤ人に対しても、同じ原則を指摘している。

彼らは厚かましい子らで、心のかたくなな者だからである。わたしはあなたを彼らのもとに遣わす。あなたは彼らに言え、「神である主はこう言われる」と。彼らが聞こうと聞くまいと（彼らは反逆の家だから）、それでも彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るようになる。エゼキエル書 2:4, 5.

エリヤの象徴には、裁きの器としての役割が含まれている。

第三の天使のメッセージを宣べ伝える働きに従事している人々は、ミラー師が採用したのと同じ方法で聖書を研究している。『預言と預言年代に関する見解』と題する小冊子の中で、ミラー師は、聖書の研究と解釈のための、次のような簡明だが賢明で重要な規則を示している。

1. 聖書に示された主題に関して、すべての言葉は適切な関係と重みを持っていないなければならない。 2.

聖書のすべては必要であり、熱心な取り組みと学びによって理解できる。 3. 揺るがずに信仰をもって求める者からは、聖書に啓示されたものは何一つ隠され得ないし、隠されることもない。 4. 教義を理解するには、知りたい主題に関する聖句をすべて集め、一つ一つの言葉に本来の重みを持たせなさい。そして、矛盾なく自分の理論を形づくれるなら、誤っているはずがない。 5. 聖書はそれ自体が規範である以上、聖書自身が自らの解釈者でなければならない。もし私が教師に頼って解き明かしてもらい、その人が意味を当て推量したり、自派の教義に合わせるため、あるいは賢いと思われるためにそのように解釈したりするなら、その推量や欲求、教義、あるいは知恵こそが私の規範となり、もはや聖書ではなくなる。

上記はこれらの規則の一部であり、聖書研究にあたっては、示された原則を私たち皆が心に留めるのがよい。

真の信仰は聖書に基づいている。だがサタンは、聖書をねじ曲げて誤りを持ち込むためにあらゆる策を用いるので、聖書が実際に何を教えているのかを知ろうとする者には細心の注意が必要である。感情に過度にとらわれ、しかも神の言葉がはっきり語っていることが感情と一致しないからといってそれを無視しつつ、自分は誠実だと主張することは、この時代の大きな迷妄の一つである。多くの人には、感情以外に信仰の土台がない。彼らの宗教は興奮から成り立っており、それがやむと、信仰は失われる。感情はもみ殻かもしれないが、神の言葉は麦である。そして預言者は言う、「もみ殻が麦に対して何になるのか」。

彼らが持ったこともなく、得ることもできなかった光と知識に心を留めなかったからといって、だれ一人として罪に定められることはない。しかし多くの者は、世の基準に迎合したいがために、キリストの使節たちによって彼らに示される真理に従うことを拒む。そして、彼らの理解に届いた真理、魂に輝いた光が、裁きにおいて彼らを罪に定めるのである。この終わりの時代に、私たちはあらゆる時代を通して輝いてきた光の積み重ねを与えられており、それに相応して責任を問われることになる。聖さの道は世と同じ水準にあるのではない。それは高く築き上げられた道である。もし私たちがこの道を歩み、主の戒めの道を走るなら、「義人の道は輝く光のようで、完全な日となるまでますます輝きを増していく」ことを知るであろう。Review and Herald, 1884年11月25日。

私たちは、私たちが決して持つておらず、得ることもできなかった光と知識に耳を傾けなかったという理由で断罪されることはない。この言明の重要な点は、「得ることもできなかった」という表現である。エリヤ、ヨハネ、ミラーは、それぞれの世代にとって、到達し得る光を表している。彼らのメッセージの存在は、米国の法的用語で「plausible deniability」と呼ばれるものの隠れ蓑を取り払った。エリヤのメッセージは、それが顕現するいかなる世代においても、あらゆる「plausible deniability」を取り去り、したがって、その時提示される光に対してその世代全体に責任を負わせる。

私の兄弟はある時、説得されてしまうのを恐れて、私たちが抱いている教義については何も聞かまいと言った。彼は集会に来ようとせず、説教に耳を傾けもしなかった。しかし後になって、彼は、それらを聞いたのと同じくらい自分は罪があるのだと悟った、と告白した。神は彼に真理を知る機会を与えておられ、その機会に対して彼は責任を負うことになる。今私たちの間には、議論されている教義に偏見を抱く者が多い。彼らは聞きに来ず、落ち着いて調べもしないで、陰で反対を唱える。自分の立場にすっかり満足しているのだ。「あなたは『私は富んでおり、財産が増し、何一つ必要としていない』と言っているが、自分が惨めで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。わたしはあなたに勧める。あなたが富む者となるために、火で精錬された金をわたしから買い、裸の恥が現れないように身にまとう白い衣を買い、さらに見えるようになるために目に塗る目薬を買いなさい。わたしは愛する者を皆、叱り、懲らしめる。だから熱心になって、悔い改めなさい」（黙示録3:17-19）。

この聖句は、メッセージが聞こえる範囲に住みながら、聞きに来ようとしない者たちに当てはまる。主がご自身の真理の新たな証拠を与え、主の道が備えられるように、

それを新しい形で示しておられるのではないと、どうして言えるのか。神の民の間に新しい光が行き渡るように、あなたがたはどんな計画を立ててきたのか。神がご自分の子どもたちに光を送っておられないという、どんな証拠があるのか。すべての自己過信、利己主義、自己の意見に対する高慢は捨て去らなければならない。私たちはイエスの御足もとに来て、心の柔和でへりくだったお方から学ばなければならない。イエスは、ラビたちが自分の弟子たちを教えたのとは異なる教え方をなされた。多くのユダヤ人が、キリストが救いの奥義を明らかにされるのを聞きに来たが、彼らは学ぶために来たのではなかった。批判するため、何か矛盾を見つけて、それによって人々に偏見を持たせる材料を得るために来たのである。彼らは自分の知識に満足していた。しかし、神の子らはまことの羊飼いの声を聞いていなければならない。今こそ、神の御前で断食し祈るのがきわめてふさわしい時ではないか。私たちは不和に陥る危険、論争点で派閥に分かれる危険の中にある。だからこそ、何が真理であるかを知るために、魂をへりくだらせて熱心に神を求めるべきではないか。『セレクトッド・メッセージ』第1巻、413。

エリヤのメッセージを担う者たちは、契約の使者が神殿を清めるための道を備える浄化の過程において、裁きの器とされる。神殿を清める働きを成し遂げる中で、現在の真理の光が明らかにされる。もしそれが明らかにされなければ、キリストがかつても今も清めようとしておられる人々は、自己欺瞞というラオデキアの衣をまとい続けるだろう。エリヤは、真理を裁きの器として提示する務めを象徴している。だからこそ、バプテスマのヨハネのメッセージを拒んだ者たちは、イエスの教えによって益を受けることができなかつたと知らされている。

「私はキリストの初臨の告知に立ち返るよう示された。ヨハネはイエスの道を備えるために、エリヤの霊と力をもって遣わされた。ヨハネの証しを退けた者たちは、イエスの教えによって益を受けなかった。」『初期の著作』258。

神の民の清めを象徴する予言的歴史において、その世代に闇か光かのいずれを選ぶかの責任を負わせる現在の真理のメッセージが、封印が解かれて明らかにされる。

しかしあなたは、ダニエルよ、この言葉を秘し、書物に封をし、終わりの時まで守りなさい。多くの者があちこちを行き巡り、知識は増し加わる。……そして彼は言った、「行け、ダニエルよ。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封じられている。多くの者が清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうち誰も悟らない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書12章4節、9節、10節。

各世代でエリヤのメッセージを代表する者たちは、彼らを裁きの器として用いるために、キリストによってご自身の大使として認められる。これは、エリヤが「きょう、あなたがイスラエルにおいて神であること、また、私はあなたのしもべであり、私がこれらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、知られるようにしてください」と言ったときに指し示していたことである。

この真理は、洗礼者ヨハネに関して、イエスによっても示されている。

彼らが去っていくと、イエスは群衆にヨハネについて語り始められた。「あなたがたは何を見に荒野へ出て行ったのか。風に揺れる葦か。では、何を見に出て行ったのか。

柔らかな衣をまとった人か. 見よ、柔らかな衣を着る者は王の宮殿にいる. では、何を見に出て行ったのか. 預言者か. そうだ、はっきり言うが、預言者以上の者である. というのも、この人こそ、こう書かれている者だからだ. 『見よ、わたしはあなたの前に使者を遣わす. 彼はあなたの前にあなたの道を備える.』」マタイによる福音書 11章7-10節

ヨハネは単なる預言者以上の存在であり、裁きの器であった. 彼の奉仕は彼の世代に明確に位置づけられていた. というのも、人々は彼を見るために荒野へ出て行ったからであり、それは、アハブの命によりイスラエルのすべてがカルメルに来たのと同じくらい確かなことだった. ウィリアム・ミラーは、1798年に封印が解かれた知識の増大を理解していた. 彼は、知識が増すにつれて神の言葉の中を行き巡った人々を代表していた. 彼のメッセージは預言の時に基づいており、1840年には、彼のメッセージと奉仕は、彼の方法論が有効かどうかを見ようとプロテスタント世界全体が注視するような形で、彼の世代に据えられた. それが確認されると、彼のメッセージは世界中に広まった.

「1840年には、予言のもう一つの顕著な成就が広く関心を呼んだ. その二年前、再臨を宣べ伝える指導的な説教師の一人であったジョサイア・リッチが、『黙示録』9章の解説を発表し、オスマン帝国の没落を予告した. 彼の計算によれば、『この勢力は……1840年8月11日に打ち倒される. そのとき、コンスタンティノープルにおけるオスマンの権勢は打ち砕かれると見込まれる. そしてこれは、私の考えでは、事実であることが判明するだろう』.

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた. この出来事は予言を正確に成就した. それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた. 学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した. 『大論争』334、335.

「1840年から1844年」は、『ヨハネの黙示録』10章の「七つの雷」の歴史を表している. その歴史の中で、『マラキ書』3章およびキリストによる二度の神殿清めによって象徴されている浄化の過程が開始された. その浄化の過程は、日を一年に当てる原則に関するミラーの理解に基づく、段階的な試練の過程であった. エリヤのメッセージを体現する者たちは、契約の使者が突然その神殿に来るための道を備え、また彼らは、光よりも闇を選ぶ者たちを一掃するために契約の使者が用いる裁きの器の象徴である.

私はあなたがたに悔い改めのための水のバプテスマを授けている. しかし、私の後に来られる方は私よりも力のある方で、私はその方の履物を持つ資格もない. その方は聖霊と火とでああなたがたにバプテスマを授ける. その手には箕があり、麦打ち場を徹底的にきよめ、麦を集めて倉に納めるが、もみ殻は消えることのない火で焼き尽くす. マタイ 3:11, 12.

ヨハネの福音書6章66節に示されているように、キリストはこの時ほど多くの弟子を失ったことはなかった. 『The Desire of Ages』でこのヨハネの箇所が論じられる中で、預言の適用の方法論こそが、弟子たちが去っていったまさにその理由だったとされている. 彼らは、文字どおりの事柄が霊的な事柄を表していることを理解できず、また、使徒パウ

口によれば、文字どおりのものが霊的なものに先立つ。

そして、こう書かれている。「最初の人アダムは生きた魂となった。最後のアダムは命を与える霊となった。」しかし、最初にあるのは霊的なものではなく、自然のものであり、その後に霊的なものが来る。コリント人への第一の手紙 15章45、46節。

進んで受け入れようとせず、ゆえに理解することもできなかつたため、ユダヤ人たちは、キリストがご自身を食されるべき天からのパンであると示されたとき、キリストを理解することを拒んだ。慣習と伝統は、キリストご自身が用いられた方法を覆してしまった。この歴史に関して、ホワイト姉妹は次のように記している。

彼らの不信が公に戒められたことによって、これらの弟子たちはさらにイエスから離れていった。彼らはひどく不満を覚え、救い主を傷つけ、パリサイ人の悪意に迎合しようとして、彼に背を向け、軽蔑してそのもとを去った。彼らは自分の選択を下し、霊のない形式、実のない殻を取った。その決断がその後覆されることはなかった。彼らはもはやイエスとともに歩むことはなかったからである。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの人と同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心になくなっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きにくい言葉だ。だれがそれを聞いていられようか』とつぶやく。」『The Desire of Ages』392頁。

レビの子らを火で清めるのは、マラキ書の「契約の使者」である。彼は自分の打ち場を徹底的に清め、麦から粗殻をより分ける。彼はこの働きを箕で行う。分離を成し遂げるのはその箕であり、この箕とは、彼がレビの子らを清めるそれぞれの時代における現在の真理のメッセージである。箕とは、裁きの器を表すエリヤのメッセージとその使者たちである。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが求める主が、突然その宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者も、見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗濯する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬して清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬する。彼らが義にかなったささげ物を主にささげるためである。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4。

洗礼者ヨハネの後に来られる方は、箕を手にしてご自分の打ち場を清め、精錬者の火のような方である。浄めの業は契約の使者によって成し遂げられ、したがって、主が新たに

選ばれた契約の民と契約を結ばれるという歴史を指し示している。古代イスラエルがエジプトの奴隷状態から救い出されたとき、その聖なる歴史の主題の一つは「長子」の問題であった。すなわち、エジプトの長子の死であれ、神がイスラエルを御自分の長子と定められたことであれ、というかたちで表れていた。

そしてあなたはファラオにこう言いなさい。「主はこう言われる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う。わたしの子を行かせて、わたしに仕えさせよ。もしあなたが彼を行かせることを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、すなわちあなたの長子を殺す。」出エジプト記 4:22、23。

神が出エジプトの際にイスラエルと契約を結ばれたとき、各部族のすべての長子の男子を祭司職の務めにささげるとというのが神の御計画であった。しかし金の子牛の反逆の際には、その反逆においてモーセの側に立ったのはレビ族だけであった。彼らの忠実さのゆえに、神は各部族の長子を祭司職にささげるという御計画を廃し、他の部族を差し置いて、レビ族にのみ祭司職を与えられた。契約の使者がレビの子らを清めるとき、それは、以前の契約の民が退けられ、新しい契約の民に置き換えられるという歴史を表している。これはバプテスマのヨハネやミラー派の場合にも当てはまり、十四万四千人についてもそうなるだろう。1840年から1844年にかけて、ウィリアム・ミラーに与えられた預言のメッセージが人々を試みる問題となり、浄化の過程が開始された。それは1844年10月22日に主がその宮に突然来られることへと導いたが、その浄化の過程は1863年まで終わらなかった。

「ダニエル書8:14『二千三百日まで、それから聖所は清められる』』という預言と、「第一の天使のメッセージ『神を恐れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである』」は、いずれもキリストが至聖所で行う奉仕、すなわち調査審判を指し示しており、御自分の民を贖い悪しき者を滅ぼすためのキリストの再臨を指していたのではなかった。誤りは預言的期間の計算にあったのではなく、二千三百日の終わりに起こる出来事理解にあった。この誤解のために信者たちは失望を味わったが、それでも預言によって前もって告げられていたこと、また彼らが聖書の根拠によって期待し得たすべてのことは成就していた。彼らが望みの挫折を嘆いていたまさにその時、そのメッセージが予告していた出来事が起こっており、しかもそれは、主がご自分のしもべたちに報いをお与えになるために現れる前に成就されなければならないものであった。

キリストは、彼らが期待したように地上に来られたのではなく、予表されていたように、天にある神の宮の至聖所に来られた。彼は、この時に「日の老いたる者」のもとへ来られる方として、預言者ダニエルによって描かれている。「私は夜の幻のうちに見た。見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、そして来られた」-地上ではなく-「日の老いたる者のもとへ。彼らはその方をその御前に近づけた。」ダニエル7章13節。

この来臨は、預言者マラキもこう預言している。「あなたがたが求めている主、すなわちあなたがたが喜びとする契約の使者が、ご自分の宮に突然来られる。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。」マラキ 3:1。主がご自分の宮に来られたことは、主の民にとって突然で、思いがけないことであった。彼らはそこで主を待ち望んではい

なかった。彼らは、主が地上に来られ、「神を知らない者や福音に従わない者たちに、燃える炎の中で報いを下される」と期待していた。第二テサロニケ 1:8。

しかし、人々はまだ主にお会いする備えができていなかった。彼らのためには、なお準備の業が成し遂げられなければならなかった。彼らの心を天にある神の宮へと向ける光が与えられるはずであり、彼らが信仰によってそこで奉仕しておられる大祭司に従うなら、新しい務めが明らかにされるであろう。教会には、もう一つの警告と教えのメッセージが与えられるはずであった。

預言者は言う。「その来臨の日に、誰が耐えうるか。彼が現れるとき、誰が立ちえようか。彼は精錬する者の火、洗濯人の灰汁のようである。彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金銀のように精錬して、彼らが義にかなった供え物を主にささげるようにするであろう。」マラキ3:2、3。天の聖所におけるキリストの執り成しがやむときに地上に生きている者たちは、仲保者なしに聖なる神の御前に立たなければならない。彼らの衣は汚れがなく、彼らの品性は注がれた血によって罪から清められていなければならない。神の恵みと自らのたゆまぬ努力によって、彼らは悪との戦いにおいて勝利者とならなければならない。天において調査審判が進められ、悔い改めた信者の罪が聖所から取り除かれている間、地上の神の民の間では、特別な清め、すなわち罪を取り除く働きが行われなければならない。この働きは黙示録14章のメッセージにおいて、より明確に示されている。

この働きが成し遂げられるとき、キリストの信徒たちはその再臨を迎える備えができる。「そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年月のように、主に喜ばれるものとなる。」マラキ 3:4。そのとき、主が来られるときご自身のもとにお迎えになる教会は、「栄光の教会であって、しみも、しわも、またそのようなものは何一つない。」エペソ 5:27。そのとき彼女は、「暁のように見え、月のように美しく、太陽のように澄みわたり、旗を掲げた軍勢のように恐ろしい。」雅歌 6:10。

主がその宮に来られることのほかに、マラキは主の再臨、すなわち裁きを執行するための来臨についても、次のように予言している。「わたしは裁きのためにあなたがたに近づき、魔術師、姦淫する者、偽って誓う者、雇い人の賃金を搾取する者、やもめとみなしごを虐げる者、寄留者の権利を曲げる者、そしてわたしを恐れない者どもに対して、速やかな証人となる」と万軍の主は言われる。マラキ 3:5。ユダはまた、「見よ、主は幾万の聖徒たちを従えて来られ、すべての者に裁きを行い、彼らのうちの不敬虔な者を、その行ったすべての不敬虔な業について罪に定めるためである」と言って、同じ光景に言及している。ユダ 14、15節。この来臨と、主がその宮に来られることは、別個の、区別される出来事である。

私たちが大祭司としてのキリストが、聖所の清めのために至聖所に来られること（ダニエル8章14節に示されている）、人の子が日の老いた方のもとに来られること（ダニエル7章13節に示されている）、そして主がご自分の宮に来られること（マラキによって預言された）は、同一の出来事の描写であり、またこれは、マタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが語られた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。大いなる論争、424-426。

最後の段落では四つの「来臨」が言及されており、それらはすべて、同じ来臨が四つの異なる仕方では象徴されたものである。その「来臨」の一つは十人の乙女のたとえである。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

もし四つの「来臨」が「同一の出来事の記述」であるなら、アドベンティズムの初期のミラー派運動で成就したその四つの「来臨」は、アドベンティズムの終わりにおけるエリヤ運動で、再び「文字どおり寸分違わず」「成就する」。

ウィリアム・ミラーとミラー派は第一天使のメッセージの代表者であり、私たちが最近引用した『初期の著作』の同じ箇所、第一天使のメッセージはバプテスマのヨハネと全く同一の性質を備えていた。私たちは、バプテスマのヨハネのメッセージを退けた者はイエスの教えから益を受けることができなかつた、という一節を引用した。次の段落で彼女はこう述べている。「第一のメッセージを退けた者は第二のメッセージから益を受けることができなかつた。彼らはまた、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る備えをするための真夜中の叫びからも益を受けなかつた。」ウィリアム・ミラーもバプテスマのヨハネも、いずれも裁きの器を表している。

もしその二人のどちらも現れなかつたなら、彼らそれぞれの世代は、光を拒んだことについて責任を問われることはなかつたろう。神はその二人の使者を用いて、ラオデキヤ的な罪の覆いを取り除き、受け入れるか拒むかにかかわらず、裁きにおいて彼らの間に預言者がいたこととして用いられるメッセージをもたらすことによって、かつての選民のラオデキヤ的な裸の状態を明らかにされた。1840年から1844年に至る歴史は、カルメル山でエリヤの供え物の上に天から火が下った出来事によって象徴されていた。真の預言者は偽預言者たちと区別された。

私たちは今、1844年10月22日以後も続いた清めの過程の概要を述べるべき段階にある。ホワイト姉妹は、1844年10月22日以後、「人々はまだ主にお会いする備えができていなかった。彼らのために、なお備えの働きが成し遂げられなければならなかつた。彼らの思いを天にある神の神殿へと向ける光が与えられるはずであり、そして彼らが信仰によって、そこで大祭司の奉仕に従っていくなら、新たな務めが明らかにされるであろう。警告と教えのもう一つのメッセージが教会に与えられることになっていた。」と述べた。

アドベンチズムが、ダニエルがモーセの「誓い」と呼んだレビ記26章の「七つの時」を退けたとき、彼らは、審判の開始に関する真理を理解するという最初の働きを超えても清めの過程が続いていたことを認識する力を失った。

今回の記事では、継続的な浄化の過程を取り上げ、1840年代にミラー派アドベンチズムが受けた真のプロテスタント主義の角を共和主義の角と対応づけ始めます。